

若手を育む漁村づくり
～新規就業者が定着しやすいように「環境」を整える～

とやま市漁協水橋町青年部
榎 栄 二

1. 地域の概要

富山県中心部の富山市にある「とやま市漁協」は、水橋町と岩瀬、四方の3漁協が平成14年に合併した組合であり、私が所属している水橋町支所は、富山県のほぼ中央に位置している常願寺川と白岩川の河口の間にある（図1）。

春には深海から産卵のためにホタルイカが接岸するため、世界でも珍しいホタルイカ群遊海面として、常願寺川右岸から魚津港までの約15km、沖合1.3kmが国の特別天然記念物に指定されている。



図1 とやま市漁協（水橋町支所）の位置図

2. 漁業の概要

水橋町支所は、正組合員16人、准組合員およびアルバイト6人の計22人で構成されている。水橋町支所の組合員のほとんどが定置網を営んでいる水橋漁民合同組合（以下「組合」という）の一員でもある。

水橋の主な漁業種類は定置網漁業で、春にホタルイカ（3月～6月）、秋にアジ・イカ・サバ等を漁獲している。

その他に刺網でヒラメやマゴチ等、ごち網でシロエビやホッコクアカエビ、一本釣りで

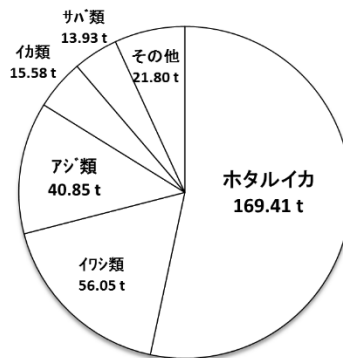


図2 H26年度 水橋漁民合同組合の漁獲

タチウオ、フクラギ（ブリの幼魚）等を漁獲している。平成26年度の組合の水揚高は1億9,586万円で、漁獲量の50%以上がホタルイカとなっている（図2）。

3. 研究グループの組織と運営

とやま市漁協水橋町青年部は、平成14年に結成され、45歳以下の12人で活動している。主な活動内容は清掃活動、種苗放流、各種イベントでの出展等である。

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

平成 14 年ごろの組合員数は 28 人であったが、60 代以上の漁業者が 9 割近くを占めていた。以前は定置網を周年操業していたが、高齢化により、平成 15 年以降はある程度の金額が見込めるホタルイカの時期しか操業できない状態となっていた。このままでは高齢者しか残らず、漁業も日に日に廃れる一方であったため、若手の確保や定着が急務であった。

組合では、加入してから 1 年間アルバイトとして働かなければならない。しかし、平成 14 年ごろのアルバイトの日当は 4,000 円であり、ホタルイカの定置網の時期しか日当をもらえない状況であった。そのため、漁業以外にもアルバイトをしなければまったく生計を立てることができなかった。たとえアルバイトの時期をしのいでも、高齢の漁業者から運よく刺網の船を譲ってもらうなどしなければ、長く漁業だけで生活していくことはできなかった。当然、いくら漁業就業者フェアやホームページで募集を呼びかけても、入ってすぐに辞めていくものが多かったことから、定着してもらうことが大きな課題となっていた。

私が漁師となった平成 20 年には、アルバイトの日当が 7,000 円となっていたものの、日当を得られるのは春のホタルイカ定置のみで、1 年を通した収入は少なく、家族を養うために午前 1 時から 12 時ごろまで漁業（定置網の時期のみ）、午後 3 時から 8 時ごろまでは飲食店で働いていた。当時の親方に誘われて漁師となったものの、体力的、精神的だけでなく経済的にも辛い時期が続いた。その後私は幸運にも、平成 25 年にそれまで 3 年間刺網を教わっていた方が引退する際に漁船と網、漁業権を譲り受けることができた。定置網以外にも刺網での収入を得ることができるようになったおかげで自立することができ、今に至っている。

他にも何人かは漁船や網などを譲り受けることができた者もいるが、このようなことは運やタイミング次第な面がある。若手を増やし、地域の漁業を活性化させていくためには、ホタルイカ定置の時期のみの操業ではなかなか定着してもらえない。そのため新規就業者が入りやすく、定着しやすい環境を整えていかなければならないと強く感じ、さまざまな取り組みを行った。

5. 研究・実践活動の状況及び成果（または効果）

(1) 新規就業者への待遇改善

アルバイトの日当が 4,000 円では生活できず、新規就業者の確保も非常に難しいことを、当時の若手が組合に必死に訴えたところ、7,000 円に引き上げられた。また、県外出身者のために組合が空き家を買取り、安い賃料で貸し出した。これらの取り組みにより、アルバイト期間中に辞めていく者が減少し、平成 21 年ごろには 30 代以下と 60 代以上の割合がほぼ半分となった。

若手が増えたことにより労働力を確保できたことで、平成 24 年にはホタルイカ以外の定置網の操業が再開されるようになった。定置網の操業期間が長くなったことで、刺網やごち網等を操業していない若手やアルバイトも漁業だけに専念しやすい環境となった（春以外の定置網の賃金は歩合制）。

その後、平成 27 年にはアルバイトの日当がさらに 8,000 円に引き上げられた。中堅

の漁業者も増えてきており、平成 27 年現在では、45 歳以下の者が全体の 4 分の 3 近くにまでなっている（平均年齢 43 歳）（図 3）。

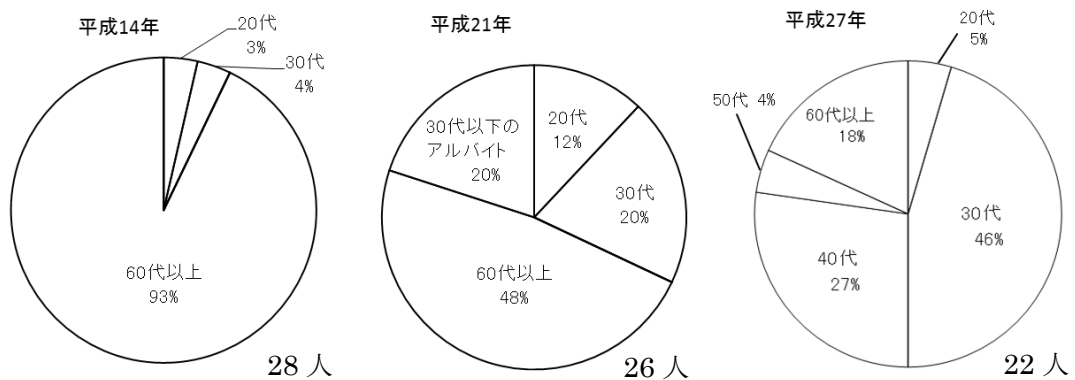


図 3 年齢構成の推移

新規就業者の漁業に関する収入については、大きく改善した。私が漁業者になる前は、春の定置網のみで日当が 4,000 円であったのが、現在は春の定置網の日当が倍の 8,000 円となり、春以外の定置網（歩合制）でも収入を得ることができるようになっている。さらに、刺網などについても、日当を得ながら積極的に手伝うことができるようになった。他にもさまざまな作業やイベントに従事した際にも賃金を得ることができる。個人や年によって変化するが、昔に比べるとおおむね 3~4 倍の収入となった。

(2) 定置網での収入の安定

水橋では、定置網が主な漁業であり、その主要な漁獲物はホタルイカである。定置網での収入の増加・安定は、若手の収入増加にもつなげることができるため、まずはホタルイカ漁での収入アップを図った（図 4,5）。

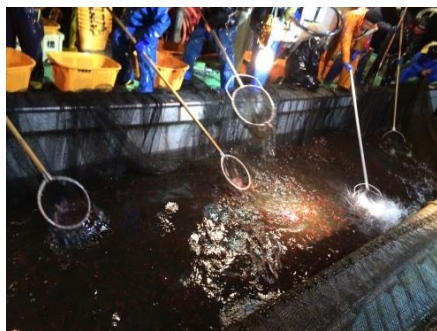


図 4 操業の様子



図 5 ホタルイカ

鮮魚用として出荷できるものを増やすため（鮮魚用は加工用と比べ、1 割から 2 割程度高い）、ホタルイカが網と擦れて傷まないように網起こしをゆっくり行い、浮いてくるものを少しずつタモで掬い取るようにしている。また、翌日に捕り残しがあると、漁獲物に混じり、見た目が悪くなるため、価格が著しく安くなってしまう。そのため、網の側面等、隅々にいるホタルイカをくまなくすくうことで、捕り残しがないように心掛

けている。さらに、網起こしが終わった後、定置網周辺に再びカモメが集まっているなどの兆候があれば、2回目の網起こしを行っている。

以上のような漁獲物の丁寧な扱いや複数回にわたる網起こしなどは、体力のある若手が増えたことによって可能になったことであり、若手増加を契機として好循環が生まれている。また、これらの好循環がホタルイカ定置の漁獲金額の上昇につながっているものと考えられる（図6）。

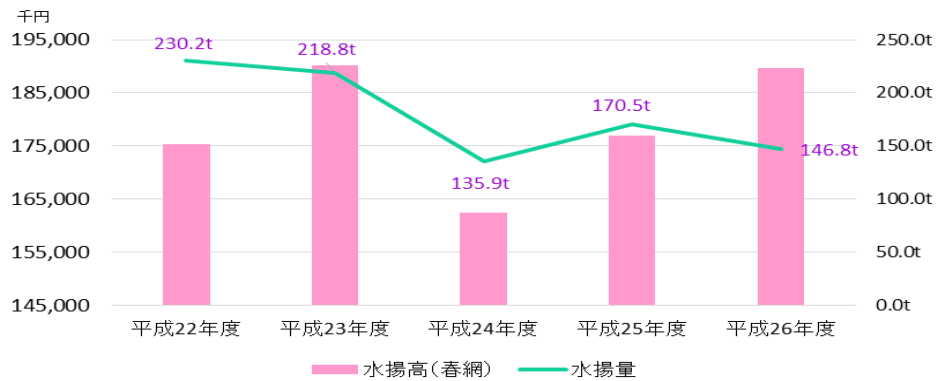


図6 水橋漁民合同組合の水揚高（春網）及びホタルイカの水揚量

(3) 新規就業者の指導

これまでに多くの若者がアルバイトとして入ってきたが、何をすればよいのか分からないまま周りから怒鳴られ、それが嫌で辞めていく者や、漁師の仕事に対して今後どう続けていけばよいか、漠然とした不安や悩みを抱えながら、何も言い出せずに去っていった者が多かった。

そういったことへの反省から、現在は新規就業者が入ってくると、ある程度の経験を経た若手や中堅の漁業者が指導担当として一人一人に付くようにしている。定置網や刺網での海上指導だけでなく、操業から帰った後でもできなかった作業の復習を陸上でやっている。危険が伴う作業については、危険予知と安全確認を徹底するなど、1日でも早く一人前になれるよう日々丁寧に教えている（図7）。

また、指導担当は人生の相談相手にもなることで、悩みやストレスをできるだけ減らすことができるように親身になって接している。



図7 指導の様子

(4) 地域の活性化

若い人たちに定着してもらうためには、地域が活気にあふれることや地域住民の方々とのつながりも重要と考え、さまざまな取り組みを行っている。

①水橋みなと祭り

組合が主催者となって毎年5月に「水橋みなと祭り」を開催している。このイベントを始めたころは地域への日ごろの感謝を込めて、鮮魚の販売を行う程度のものであったが、地元の商工会や企業、地域住民等の協力を得て、年々その規模が大きくなっている。



図8 水橋みなと祭り 鮮魚販売

平成27年はホテルイカの炊き込みご飯やホテルイカの鉄板焼き等の提供、水橋保育園児の絵画展示、ホテルイカ発光ショー、富山市消防艇による色水放水など、多彩なイベントを行ったところ、約1,000人の来場者が集まり、大いににぎわいをみせた(図8)。また、祭りには毎年多くの子もたちも集まっており、このような子どもたちが将来水橋で漁師になりたいと思えるような漁村にしていきたいと考えている。

②船上ウエディング

組合が平成27年8月に開催した花火見物イベントがきっかけとなり、翌9月に新郎新婦、友人らとともに企画し、船上ウエディングを行った。



結婚式では、わら網で作成した特製アーチや新郎新婦の名前が記された大漁旗、紅白の色水放水等の演出を行ない、2次会で新鮮な魚介類のバーベキューを振舞った(図9)。

天候はあいにくの雨となったが、親族や友人、地元住民と組合員の約70人が2人の新たな船出を祝福し、素晴らしいイベントとなった。

また、10月に海上合コンを企画したところ、多くの若者が集まるなど、これからもさまざまな話題を提供していくことで、漁業と地域を活性化し、魅力ある街づくりに貢献していきたいと考えている。

図9 新聞記事

(5) その他の活動(海浜清掃)

水橋町地区は、常願寺川と白岩川という2つの河川の河口に位置しているため、大水等があった際には、河川から大量のごみや流木が漁場に流れてくる。漂着物による漁網や漁具の破損被害をできるだけ防ぐため、毎月25日ごろ、漁業者全員で河口周辺の清掃活動を行っている(図10)。全員で行うことで、漁場環境の保全だけでなく、みんなの結束力を高めることにもつながっている。



図10 海浜清掃の様子

6. 波及効果

アルバイトの日当の向上や定置網の周年操業、定置網以外の漁での日当等により、年間を通して収入を得ることができるようになったため、ハローワークへも募集をかけることを予定している。

また、ホタルイカ定置以外の漁業においても好影響が及んでいる。刺網では、年配者がまだ多かった平成20年ごろの操業日数は、年間90日程度であったが、体力や意欲旺盛な若手が増えたことで、現在は年間210日程度となっている。また、近年高価格となっているシロエビの漁獲においても若く意欲ある漁業者に代わったこと、さらには先にも述べたように平成24年から秋網定置を再開したことなども影響し、ホタルイカ定置以外の年間水揚げも上昇傾向にあり、水橋の漁業の活性化がここにも現れている(図11)。

また地域活性化の取り組み事例でも紹介したように、最近はみなと祭りやその他のさまざまなイベントを、全員で企画し実行するようになってきている(図12)。イベントの度に皆で話し合うことで、より強い仲間意識や一体感が生まれている。これは漁業についてもしかりであり、さまざまなアイデアを出したり、何ごとにもまずはやってみようという風土ができつつある。

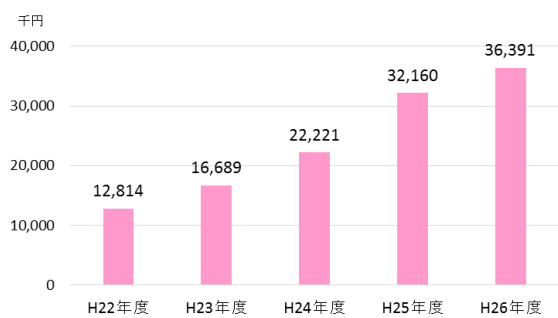


図11 ホタルイカ定置以外の年間水揚げ高



図12 企画ミーティングの様子

7. 今後の課題や計画と問題点

定置網については、以前に比べて水揚げ高がアップしているが、今後も若手の収益増加につなげるためにも、さらなる改善を図っていきたくと考えている。具体的な計画としては、平成28年から定置網の網数を4から5に増やし、漁獲量の増大を図っていくこととしている。また、定置網の材料として、わら網を使用しているが、そのコストが年間3,000万円以上かかっている。わら網はホタルイカを漁獲するのに一番適していると昔から伝えられ、漁期の終わりに海底に沈められると、それが魚礁として機能してきた。魚を捕ることだけでなく、漁場を育て守る先人からの知恵をこれからも継承していくために、わら網の強度を見直し、再利用を行なう等の収益構造の改善を図っていかねばならない。

また、若手の割合は増えたが、いまだ全体の組合員数は少ない状況にある。近年行ってきた若手の確保や定着につながる取り組みを継続的に行っていかなければ、またすぐ以前と同じような状況になってしまうことを危惧している。

今後も若くエネルギーにあふれた人をどんどん取り込んで、将来にわたって水橋の漁業や地域が活性化していくように、さまざまな取り組みを行っていききたい。